

新刊紹介

フイ
ヒテ 知識學の概念並に第二序論

山本 饒 譯

新カント學派の凋落せる後、具體的なる實在性の要求せられる今日、フイヒテを顧る必要があるであらうか。一般に古典の紹介は特にかゝる疑問に答へる必要があるやうに思はれる。

不安な現代に於てその哲學的關心の尤なるものの一つは辨證法であらう。何故なればそれは矛盾の論理であるからである。近代に於て辨證法が哲學の主要な問題となり始めたのは言ふまでもなくカントに於てである。けれども彼に於ては、それは「假象の論理」として有限的な人間悟性の領域から否定的に逐はれて、單に消極的な役目しかなかった。けれども事實は勿論カントに於ても、必ずしもさうであるとは言はれない。偉大なる彼に於ては既に、彼の求めたもの、或は彼について今日まで歴史的に評價斷定せられたもの以上のものが、多く曉の鐘を鳴らして居り、その故にこそ、古い形を具へた彼が常に新しい生命を有つてゐるのである。また歴史的に見ても、積極的に辨證法を肯定し、それを實在の論理として建設したヘーゲルが、カントの先蹤を見ずしては、歴史的ヘーゲルになり得たかは、言ふまでもなく疑問であらう。

斯くの如くカントが既に、自己自身のうちに自己を超えゆく思惟内容を有してゐたが故に、彼の後繼者フイヒテに於ては、哲學の根本精神を「實踐理性批判」に仰ぎながら、哲學の方法としては先驗的方法を超えて辨證法的方法を執つたのである。何故さうなつたか。それは前述の如く、既にカントに於て然うなるべきことが豫感されてゐたからである。即ち直観と概念との具體的な綜合、經驗世界と理性領域との積極的な統一、三批判書の内容の聯關など、これらの問題はカントに於ては、單に圖式的に解明された位のものであるか、或は、消極的になり主觀的になり答へられた位のものであつて、而もそれらに執れも積極的に解答されればならぬ程頂點に達したラティカルな問題として、カント哲學の裡に伏在してゐる。カントを眞に理解するものはこれらの問題に答へるものであり、そして斯くすることに依つて同時に彼はカントを超えらるものである。そして既にフイヒテがそれに値する最初の人であつたことは言ふまでもない。

「カントよりヘーゲルへ」の著者クロナーは同書に於て、カントの第一、第二批列を第三批列に於て見直すべきことを、其處に於ける彼の餘りにヘーゲル的な見地より論じてゐる。然しこのことは、具體的な内容を論外に措くならば（かゝることが重大な問題であることは勿論であるが）、既にフイヒテに於て果されてゐると言ひ得るのではあるまいか。普通フイヒテはカントの第二批列の立場に於てカントに追隨する人であると言はれて居り、そのこととは「興味からよりも絶望からしてカント哲學に身を投じた」フイ

ヒテが自己救済と安心とをかの實踐理性の優位に求め、性格的にも最も倫理的であることは、彼自身の語るところである。けれども第三批判の深い研究がなく、そこに於ける根本精神としての統一の原理の體得なくしては、「全知識學の基礎」を著し得たかば疑問であらうと思はれる。カント的な未だ批判的可能的に止る命題

„Da kannst, denn du solist.“ を謂は、 „Du tust, dann du solist.“ なる形而上學的現實的命題にまで發展せしめ、「カントの諸々の道徳的原則は恐らく世界に對する 恩恵であるであらう」と彼自ら語るためには、既に「カントの『判断力批判』よりの抜萃並に説明的改作」が企圖せられ（一七九〇年の九月より一七九一年の初の間）、一七九四年の知識學の前編れをなしてゐなければならなかつたのである。（I. H. Fichte; J. G. Fichte's Leben und literarischer Briefwechsel, II. Auflage. Bd. I. Buch IV. Kap. IV）勿論かゝる統一原理が道徳的實踐と結びついて、カントの反省的なものより權威的なものに改作されたことは、内容的に云つて、「全知識學の基礎」その他の著作がカントの三批判書の龐大な内容を含むべく餘りに規模が小さく、それはシェリングを経てヘーゲルを俟つて初めて充實された問題である。けれども一方から見れば、斯かる統一原理が純粹我の道徳的實踐と結びついたことは、フィヒテの個人的性格に基くと言はれる以上の重要な意義を含んでゐると思はれる。それは辨證法の本質に關する問題を含んでゐるからである。辨證法がカントに於ける如く、假象の論理でなく實在の論理であるがためには、彼に於て可能的反省的統制的に止つ

たものは、客觀的な精神的存在と考へられねばならぬ。それは自我と非我との交互作用を豫想して初めて可能になる。カントに於ては汝は單に我の畏敬の對象に過ぎず、未だ我と汝との間に實在的な限定交渉が考へられてゐない。彼の道徳が主觀的な *Moralität* に止つて、客觀的な *Stofflichkeit* にまで到り得なかつた所以である。何らの質料的豫件をも有しない、人格は同じやうな他の人格と畏敬の感情に於て目的の王國を建設し得ても、それを現實的な共同社會に齎す術を知らないであらう。認識に於て直觀の内容は結局のところ概念の形式に包攝されてゐる。超越的對象としての物自體は認識の圏外に放逐されてゐる。道徳に於てそれが畏敬の對象となつて現れても、それは絶対に感性的性格を有たぬものとなつてゐる。目的論は兩者の調和を企て、ゐるが、然しそれは主觀的な *Ansich* の見地を残してゐる。一體、理論理性、實踐理性および反省理性が別々に考へられるならば、それに通ずる理性一般がそれらの先に考へられなくてよいのであらうか。寧ろ後者が具體的な主觀であり、前者は之を種々の見地に於て初めて見られるものではないか。客觀に對する主觀の自律性の主張はカントに於ける根本的又調期的な態度である。然し自我は非我なくしては自我になり得ないことは言ふ迄もない。加之さらに重要なことは、若しさうであるとすれば、自我の自律性は同時に非我の獨立性を同時に必然的に承認しなければならぬのではあるまいか。サロモン・マイモンがカントの先驗的演繹論に潜む循環論を指摘し、且つ可限定性の命題を立て、物自體の概念を理念の概念に改更したに

拘らず、なほ懷疑論を——ヒュウムのそれとは異つた懷疑論を執らねばならなかつたことは、物自體の實在性に對する告白と見られないであらうか。其處に於ては物自體は單に可想的のみにして不可認識的であるといふ許りではなく、寧ろ思惟さへも超越すると言はれる。物自體が認識できない許りでなく思惟すら能はぬと言ふことは、それが表象的對象として與へられるものでなく、從つて又、意識の一方的支配的な限定を許すものでなく、自らも意識に對し限定力を有することを示してゐると言はれやう。(自我の可限定性は反面より云へば對象の可限定性である筈。)ギリシヤの思惟以來カントまで多くの哲學者を惱ました質料の問題が、茲にマイモンを経てフイヒテに至つて、嘗て見ることのなかつた程の新しい意義を齎したと考へられるであらう。フイヒテの自我は事行として從來に見られなかつた意義を有し、かゝる自我に對することに依つて非我の實在的な限定力が考へられる。自我の實踐的行爲および其の絶對的存在の主張は相合して必然的に非我の限定と存在とを要求する。非我の *Das Sein* が自我の働きを通して其の *Das Sein* を、そして同時に自我も逆に自身の内容を明かにする。そのことは然し非我の絶對的存在なくしては、事行としての自我は結局カントの第二批判の立場に歸するの外ないであらう。換言すれば、自我と非我との對立の實在性は自我の實踐に根據を有すること、更に言へば、彼に於て實在と實踐とは不可分離的であること——これが彼の哲學の根本精神である。彼が自我を形式としてではなく事行と解したことは、ロマンティックの時代的制約に依る

と考へられ、そのことが不安なる現代にとつて餘りにオプティミスティッシュであると考へられるにしても、自我の絶對主張がなさればなされるだけ、非我の絶對性も主張されねばならず、其處に於て實踐の具體性が初めて意圖されるのであると考へられやう。それはマイモンの深刻な懷疑論を通してならなかつたことも忘れてはならないことである。ヘーゲルに於ては斯かる非我——無——はその絶對觀念論の立場よりして有の自己否定と考へられるのみである。有と無との綜合としての成は單に兩者の止揚に依ると云はれるのみにして、如何にして止揚せられ如何にして成るかといふことは説かれてゐない。ヘーゲルに於て偉大なものは、彼が辨證法論理と實證的な史的發展とを結合せる點に存すると思はれる。然しそれは換言すれば流れ去つた史的現實を觀想的に跡づけてゆくに外ならない。それは流れつゝある現實の決定に就いて關與する所はない。彼の辨證法的方法的契機であるところの「我々〔哲學者〕に對して」と「それ〔意識〕に對して」とはフイヒテの「哲學者に對して」と「自我に對して」を襲用したものと考へられるが、フイヒテに於ける如く、「自己自身を構成する自我は哲學者自身の自我に他ならぬ」(本譯書一五二頁)ことが考へられて居らないやうである。彼に於ては「それに對する」といふ關係は單に *bekannt* なる直接知に於てのみである。けれども最も直接的なる關係が單に直接知の關係に止るかは疑問であつて、「我々に對して」と「それに對して」との間には、外への働きに於て自己を亡失する實踐的な自我が考へられねばならぬのではあるまいか。「哲學者に對し

て」と「自我に對して」とは行爲に於てのみ一つであつて前者に於てはその働きが外に働き、後者に於ては内に働く、その故に、前者に於てはその働きに於て自己を失ひ、後者に於ては自己の働きを——而も前者よりの自己還歸に於て——見替るのである。斯くの如くしてフイヒテに於ては我々に對する存在は單に表象的對象ではなく、「事態がさうであるのは、私がさうあらしめるからである」と云ふことは、單に自我自身に就いてのみならず自我に就いても言ひ得る原理的な事柄である。彼に於ては存在は實踐の媒介を經たる存在である。辨證法が運動の論理であると言はれるとき、その運動は *Kinematik* である前に *Kinetik* であることが要求されるのではあるまいか。若し辨證法をそのものとして更に探求し、單なる觀念辨證法より唯物辨證法への顛倒を警戒しやうと思へば、そして又、辨證法的神學者のヘーゲル辨證法に對する非難を顧みて、而も前者の主張する神と人間、汝と我との間の無限的質的相違の更に辨證法的な統一、非連續の連續の更に辨證法的なる統一に迫り、神を信仰に於て戦ひとるのでなく、現實を實踐に於て戦ひとらうとすれば、フイヒテの立場は其の儘にては是認さるべきでない(抽象的な非我の概念の如き)にしても、尙、マイモンの懷疑論を克服した彼の説は不安なる現代に十分の光を投じ誠實なる模範を示すことと思ふ。更に本譯書の「第二序論」に於て論ぜられる知的直觀の説が、現象學の本觀直觀の表象性に對して補ふところ大なることも、本譯書を読む目的の一つを爲すであらう。寧ろ此點こそ本譯書の紹介に於て爲すべきことであつたと思

ひ、その點に觸れずして擱筆せねばならぬを遺憾とする。著書の殆んど全部を講義の形式に於て著したフイヒテの著書に於ては、その言葉は書かれてゐるよりも話されてゐるのであるが、此の譯書は其の趣をよく傳へてゐることを附言して置きたいと思ふ。

(東京岩波書店發行、定價金貳圓五拾錢 紹介者伊達四郎)